

榊原政常作品集 第四卷

アデイン書房

編集委員 阿坂卯一郎／豊博秋／榎田薫／内木文英

榊原政常作品集第四卷

昭和五十一年十月十日 初版印刷
昭和五十一年十月十五日 初版發行

著 者 榊 原 政 常

装 幀 者 渡 辺 千 尋

發 行 者 山 口 正 毅

發 行 所 ア デ ィ ン 書 房

東京都文京区白山一―六（中島ビル）
振替口座（東京）二―二九八九一

電話（八一三）七六七五

印刷 東京美術

製本 イマキ製本

MASATSUNE-SAKAKIBARA

©1976

0074-0013-0137

榊原政常作品集

第四卷

●目次●

かまばら

五

神変猿飛佐助

三七

たけのこ

一〇五

埴生の宿

一二九

天使が一人いる

一七三

廬山夜雨

二二九



全国指導者講習会について

二六〇

二足のわらじ

二七二

解説——内木文英

二七九

か
ま
ば
ら

時　　むかしむかし

場所　あるところ

登場人物

アンダロ（庵太郎）

ドンジロ（鈍次郎）

おまつ

軽快な音楽——
幕あく。

1

はじめ、舞台まっ暗。

突如、女の声で「ほんにまあ……どないしたろお！」

男の声「わあ、かんにんしてや！」

ケンケンした女の声「ぶちころしたるかあ！」

男の声「ゆるしてやゆるしてやあ……わあ、助けてくれえ！」

2

F・I——

舞台は一面に野づら。上手より一本の大きな松。下手より腰のかけられる程の切り株。

軽快な音楽——

上手からドンジロ、ひょこひょこ出て来る。

酒の入った瓢箪を肩に。

ドンジロ（キョロキョロ見廻しながら）はあてな。何やしらん、助けてくれと、絹をさくような女の……いや、たしかにあれは男の叫び。はあて、けつたいなこっちゃ。

下手から、再び「わあ、ゆるしてやあ！」

「どないしたろお！」

ドンジロ（下手をすかし見て）ははあ、あれか。アンダロ夫婦やな。いつに変らぬカカ天下……オ、どづかれよるな。ア、逃げ廻って……オ、こっちゃへ来よる。こらあおもろい。かくれて様子見たろ。（上手へ……）

3

音楽――

下手から、アンダロ逃げて来る。

あとから、女房おまつ、追って出る。左手に鎌を持ち、右手に枴（おうこ）を振りかざし、物凄い剣幕である。

アンダロは「ゆるしてやあ」と言いながら逃げ廻る。

おまつは「どないしたろお」と追い廻す。

トド、中央でアングロはへたばってしまうのである。（音楽とまる）

アングロ かんにかんに。この通り手を合わして拝むがな。かんにかんに。

まつ わびてすむことと思つてか。

アングロ はい、すんまへん。

まつ なんとお！（枴を振り上げる）

アングロ わあ、ゆるしてや。弱い者いじめしいないな。

まつ （呆れて、振り上げた枴をおろす）弱い者いじめいうて……どだいあんたはあてのなんやね。

アングロ ………。

まつ あんたはあての連合つれあいやで。夫やで。

アングロ すんまへん。

まつ あやまってばっかし……ほんまにあんたは甲斐性なしやな。

アングロ はい……。

まつ 甲斐性なしのくせに……昨夜はどこに泊った。

アングロ そらさっきから何べんも言うてるがな。昨日は隣村のお庄屋のところで、アングロ、よう

来た、一寸手伝え、おうごくろうさん、おおきにおおきに、まあ一口のめ、いやはってな、御馳走になったんや。ええ酒やったなあ、一升なんぼしますやろ。

まつ 知るかいな。かいしよなしのくせにのんだくれのあんたやさかい、それをいいことにして、

みともない、ガブガブのんだんやね。

アンドロ そら好きな酒やで、ちょびつと。

まつ ちょびつとお……？

アンドロ ちょびつと残して、みなのだ。

まつ 意地汚な！ 御馳走や思うて。

アンドロ 御馳走やなければ、あんなええ酒のまれへん。

まつ それからどうした！（枴を振り上げる）

アンドロ それから……ま、そないおそろし顔せんと……聞き。

まつ はよ言え！

アンドロ 言います言います。それから、お庄屋の旦那さんものむ、わいものむ、歌うとうたり、手

拍子とったり……いつの間にやら夜がふけたさかい、とまって行けやい、はあいおおきに……。
そういうわけや。

まつ うそだませ！

アンドロ うそやない、ほんまや。

まつ どこへ泊ったやら分らへん。

アンドロ ほんまや。うそと思うたら、庄屋どんのどこに行てたんねて見。

まつ あほくさ。ほなことできるか。

アンドロ へ。

まつ お庄屋はんのところで一寸手伝えいうたて？

アンドロ へ。そう言われてみると、お庄屋はんにはいつもえらい世話になったあるさかい、いやとも言えんで……。

まつ どのだい何を手伝ったん？

アンドロ 裏の山へ行て、草刈^{たきぎ}つて、薪^{たきぎ}とるのや言うてな。

まつ それを手伝ったんやね、おのれは。

アンドロ おのれ……ひどい言われ方。

まつ 何やと。

アンドロ へ。仰せの通りで。

まつ (ますます猛つて) さあ、いよいよ了見ならん。ぶちころす。(杓を振り上げる)

アンドロ (頭をかかえて) おゆるしおゆるし。

まつ 今の先、おのれはなんとぬかした。あてが今夜の飯^{まき}たくの^{たきぎ}に裏山行て薪^{たきぎ}とつて来てくれというてたのんだ時、おのれはなんとぬかした、いうてみ。

アンドロ さあ……なんと言うたか……。

まつ 疲れておるさかい、いややと言うたやないか。

アンドロ よう知つとつて聞くことないがな。

まつ なんやと。

アンドロ へ。おゆるし。そない吐かしおりました、かも知れん。

まつ　かも知れんことあるか！　庄屋はんの薪はへいこら言うて取りに行くが、あての薪はとりに行かれへんのやな。

アンダロ　そ、そういう訳やないけど、たんだ今戻ったばかりでクタクタに疲れているさかい、一寸の間休みたいと……。

まつ　つかれているのはおのれの勝手や。

アンダロ　へ。

まつ　なんと甲斐性のない男や。おのれも一軒の家のあるじやないか。せんでも屋根がもるよつて、一寸なおしてくれいうたら、おおこわ、あんな高いところよう上らんいうさかい、しゃない思うてあてが自分でなおしたほどや。屋根のよりまで女になおさして、どこに男の値打がある。今日は今日で、よそで遊んできおって薪一つとりに行かん。それでも男といえるか。

アンダロ　へ。すんまへん。けど別に遊んできたわけでは……。

まつ　やかまし。さ、のちと言わず、今の今、この鎌と枴を持って、裏山へいぬか、いなぬか。返答しだいで了見がある！

アンダロ　いぬいぬ！

まつ　いぬな。

アンダロ　いにま！

まつ　いぬなら、それでよろし。サ、鎌。

アンダロ　へ。(受け取る)

まつ 枳！

アンダロ へ。(受け取る)

まつ さっさといね！

アンダロ へえ！

まつ、アンダロをにらみつけて、足早に下手に退場。

アンダロ、そつと顔を上げる。しょんぼりしている。

アンダロ あああ、なんと恐しい女やろ。(口まね)今の今、裏山へいぬか、いなぬか。いぬなら、それでよろし、サ、鎌！ へ、男を何と思てけっかるんやろ。

ドンジロ、上手から出て、アンダロに話しかけようとする。が、フト下手を見て、あわててまたかくれる。

下手からこっそりおまつが……。

かまばら

アンダロ (知らずに) あああ、おれほど運の悪いもんはないなあ。ああいう^{かま}嬢持ったら一生の不作やいうが、ほんまやな。

まつ (どなる) なにうだうだぬかしている。

アンダロ うへ！

まつ さっさと裏山へいんだらどや！

アンダロ へ、いにま、いにま！

まつ 遊んでいたら日が暮れる。さっさと去いね！

アンダロ はい！

まつ、下手に退場。

4

アンダロ、今度はようく女房の立去るのを見届け、やおら鎌と杓しやくを持って立ち上ると、しょうことなし、上手に向って歩き出す。狂言風の道行の心。軽快な音楽——
以下当分はアンダロの一人舞台。

アンダロ やれ、こわや、こわや。「遊んでいたら日が暮れる！」亭主を子供やと思っておる。情ないこっちゃ。あの女かて、嫁はんにもろた頃は、あんなもんやなかったなあ。「アンダロはん、飯までけたえ」しおらしい顔して言うたもんや。「さっさと去ね！」えらいちがいや。世の中いやになる。そう言えば、おまつばかしやあらへん。全く世の中いうもんは、どないしてこううまい